

## 下北沢再開発計画の見直しを求める イヴェントに見えた運動の成熟

伊達政保

東京都世田谷区下北沢、新宿からの小田急線と渋谷からの井の頭線が交差する町だ。空襲で焼けなかったため、細い通りが縦横に交差し、駅前の開市から発展したマーケットを中心に、低層の小店舗や飲食店が建ち並び、住宅地とも共存している。現在はライブ・ハウスや小劇場が幾つもあり、音楽と演劇の町としても知られている。当然だが居酒屋やしゃれた飲み屋も多い。平日でも多くの若者達が訪れ、路地から路地へ徒歩で買い物したり遊んだりする。俗に下北沢文化といわれる、独特の文化が栄える町となっている。

4年前、その下北沢に町を南北に分割する道路と高層ビルによる、再開発計画が持ち上がった。世田谷区の素案では駅前のマーケットを潰してロータリー化、道路幅26mの「補助54号線」を東西に走らせようというのだ。完成すれば町の構造が全く様変わりしてしまい、現在の下北沢らしさは殆ど失われることとなる。これに反対する住民、

商店主、店のマスターや、下北沢に縁のあるミュージシャン、映画・演劇人、作家やアーティストたちが、「下北沢商業者協議会」(ジジジボ、下北沢)という団体を結成して、反対運動に立ち上がったのだ。

ここ数年、オイラの住む世田谷区は自民党の元都議会議員で建設業界出身の区長が就任してから、小田急線高架問題、住基ネット問題などで、住民に対し高圧的な姿勢を示してきた。今回またもや住民との話し合いをかたくなに拒み続け、住民の多くが反対意見なのにもかかわらず、東京都に対し「補助54号線」と駅前交通広場の事業認可を求めたのだ。地方自治体の長が業界の利権のために、必要もない再開発事業を推進するという、よくあるパターンである。東京都はこれを認可し、世田谷区都市計画審議会は、この計画案の執行採決を行なった。住民や商店主達は「まちねシモキター行政訴訟の会」を結成し、東京都に対し事業認可取り

消しの裁判を起こしていった。

またこの事業は小田急線高架化と関連していた。高架に反対し地下化を求めた住民の運動にも関わらず、下北沢から先の高架は完成されてしまった。以前は高架とされていた下北沢駅の計画は、いつの間にか地下化へと変更されていた。これは明らかに「補助54号線」の邪魔になる小田急線を、この地区だけ地下化し、駅周辺の地上を含め再開発するということなのだ。それでは何のための高架強行だったのか。行政の欺瞞性は明らかだった。

こうした状況に対し、住民団体は事業凍結と計画の見直しを求めるため、これまで何回か、シンポジウムや行政に対するデモンストレーションを行ってきた。今回、9月5、6日の二日間にあたり「SHIMOKITA VOICE 2009」と題し、先の住民3団体共催によりシンポジウムとライブが行なわれた。初日のシンポジウムは弁護士や前国立市長を交えて、開発計画の問題点や公共事業と市民運動、行政訴訟の現状等が論じられた。また、行政側があたかも道路工事が始まっているイメージを与えようとしていることに対し、現在行なわれている工事は小田急の地下化工事であり、道路工事は用地買収を含め始まってはいないことが報告さ

れた。二日目のロング・シンポジウムは大学教授らをパネリストに、無駄な公共事業と日本の街づくりの問題点を指摘した。それに続き、個人経営店を取り巻く問題として、店主たちや住民たちが発言し、店と文化やコミュニティとの関わりについて討論がなされた。工事によってコミュニティが物理的に破壊される以前に、街としてのコミュニティが解体しつつあるのではないかと、反対運動だけでなく運動を通してコミュニティの再構築も計っていくという発言は、この運動の成熟を表わしていた。シンポジウムの最後に、「下北沢を破壊する補助54号線および駅前ロータリーの予算凍結と高層再開発見直しを」という鳩山新政権への要請決議が採択された。シンポジウムが超満員だったのも、これまでの運動の成果なのだと思う。

二日とも、シンポジウムの後に、この運動に賛同するミュージシャン達、久士N茶谷、志田夢、大友良英、グループ、反対運動のボスターも揃っているリリー・フランキー、おおかた静流と梅津和時、渋谷知らズ等のライブが行われた。独自のミュージック・シーンを代表するミュージシャンが、一堂に会するライブなんてめったにあるもんじやない。やはり下北沢ならではの。